

## おわりに

この三つの作品にみられる共通のものは、いずれにおいても、子どもに振りつけによる強制的な制限をすることなく、まったく子どもの中からの発想、子どもの中からの自然な表現によって構成されていることである。「動物デパート」から「おいけのともだち」「ゆめのいろいろ」と作品から要求されるものは高度になっていくが、そこには何ら強制的に押しつけたりしないで、自らの感性的な表現をしていく。

この自らの発想による経験の連続は子どもに自らの発想という自発的な表現経験を得させ、それは将来、自己を真に個性的な表現する人間へと育て上げていくであろう。

論理的な思考の中でのみ物事を判断すれば、論理に即した答えしか得られない。しかし、人間に属する精神活動は、まず感性にはじまり、知性・理性・悟性にまで至るのである。

パブロ・カザルス（1876～1973）は20世紀が生んだ史上最高のチェロの演奏家であり、彼の演奏の高い芸術性は国境を超え、世代を超えて、世界中の人々に支持され、愛されている。

彼の言葉に「学校はいつになったら、 $2+2=4$ とか、フランスの首都はパリとかではなく子どもたち自身は何であるかを教えるのだろうか？ 子どもたちよ！ きみは驚異だ！ きみはシェークスピアにも、ベートーベンにも、どんな人にもなれるのだ！ だからこそ、きみと、おなじ存在である他人を傷つけることなどできないのだ！ 敵対するものは殺すべし、という掟がはびこる時代に生きなければならなかったことを、私は悲しく思う。祖国への愛、それは自然なものである。では、なぜ国境を超えて他の国の人々を愛してはいけないのか。

われわれは、一本の木につながる木の葉である。人類という一本の木の……」

彼のこの人間としての情感が、どうしても知識至上、論理至上の世界からは聞こえてこない。ここに教育のひとつの欠陥があるのかもしれない。

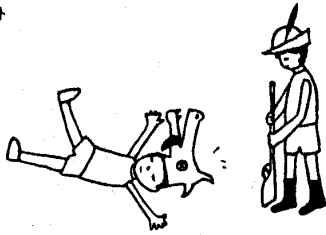
### ・引用文献

リズムあそび	桐生敬子・近藤すなほ共著（P31～36）	聖徳学園出版部
幼児のリズム表現あそび	桐生敬子著（P54～58）	学習研究社

### ・参考文献

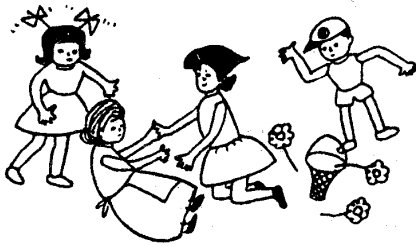
幼児教育大系	第5巻	幼児の表現活動（1）	第1分冊
表現活動総論	藤田復生・山田 武共著		

A' スポット



おおかみのびてしまう。

最後の2小節の時、ハンターの者はおおかみめがけてズドンと打つ表現



赤ずきんかけつけておばあさんを助けおこす。

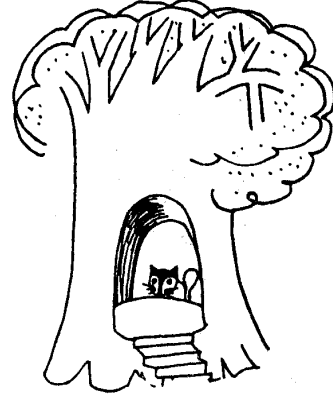
おおかみは最後の音でひっくりかえる。

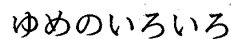


もとの場所へ2人づつ手を取りあって帰る。  
夢がきめたような感じで。

動物村のおよめさん

B スポット





1. 教師と子供の、お話づくりをする。
2. その話の内容となるものの（子供が表現する内容となるもの）話しあいをする。
3. その内容についての模倣あそびをする。
4. 友だちはどの様な表現の分担をするのか。自分はまた、どの様な表現の分担をするのか、よく理解するまで、話の内容を充実させる。
5. 耳なれたリズムをつかって、そのものになって動いてみる。

6. ゆめのいろいろの曲を何べんもきかせて親しませる。

7. まづAの部分だけ曲にあわせてぶ表現させてみる。各部分、部分を同じように部分練習をする。何べんも繰返しリズム表現をしているうちに、そのものになりきっての、動作や表現がまとまってくる。子供達は、それになりきって踊っているうちに喜びを感じて、先生や友達の前で発表するようになる。

— 55 —



### あかずきんちゃん

- a. スポット 登場人物が並んで、かるく歩いたりとんだりしながら行列で出てくる。



- b. スポット さあー、赤ずきんちゃんをはじめましょうー。というような感じで。

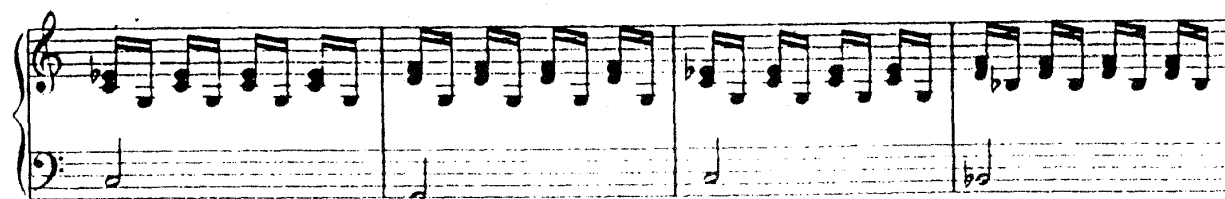


作品3 「ゆめのいろいろ」

集団活動、リズムあそびのいろいろな作品を経験した幼児にとって、身体は音楽に協調して動くようになっているであろう、また音楽を身体に協調させるまでになっているであろう。いままでのことばの誘導にもとづいて展開されていた表現も、ここにことばをはなれて、もっと自由に思いのままに、その想像をふくらませ、かきたて子どもに表現をせまってくる、この「ゆめのいろいろ」ではAの部分16拍、Bの部分8拍、Cの部分16拍、そしてAの部分16拍にリピートしておわる構成になっている。そのすべての場面を子どもたちに開放して動作を創造的に作りあげていく。

ゆめのいろいろ

石川 ゆり子 作曲

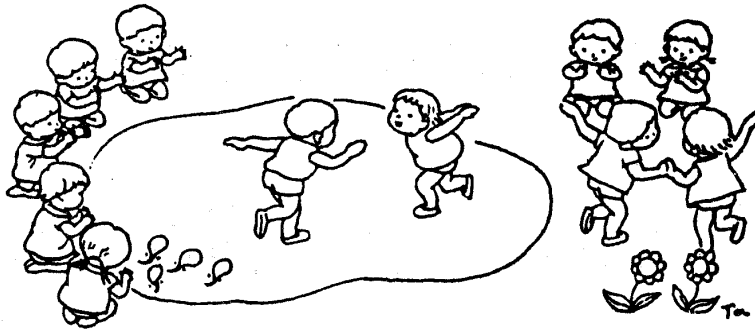


2. ひらひら ちょうちょ  
 なかよし ちょうちょ  
 おいけの まわりを  
 とぶよ ひら ひら

構成 前奏 4小節（8呼間）

- Ⓐ めだかのおどり 12小節（24呼間）
- Ⓑ ともだちのめだかとあそぶ（歌の部分）8小節（16呼間）
- Ⓒ 間奏 4小節（8呼間）
- Ⓓ ちょうちょのおどり 12小節  $\frac{5}{8}$  拍子（24呼間）
- Ⓔ ともだちのちょうちょとあそぶ（歌の部分）8小節（16呼間）
- Ⓕ 間奏 4小節  $\frac{2}{4}$  拍子（8呼間）以上をくり返す。
- Ⓖ 後奏 8小節（16呼間）

体形 2人組で、1人ずつはなれて位置する。他の者はまるくなって座り、池をつくる。



内容 前奏 4小節（8呼間）・そのまま開く。

- Ⓐ めだかのおどり 12小節（24呼間）
  - ・1～4小節（8呼間） めだかのAは泳ぎだす。
  - ・5～8小節（8呼間） めだかのBも泳ぎだす。
  - ・9～12小節（8呼間） めだかのA、Bは、自由に泳いで、12小節めで2匹のめだかはごあいさつ。
- ▶ 留意点 めだかのA、Bは、動きをはじめかりいっしょにしてもよい。
- Ⓑ ともだちのめだかとあそぶ 8小節（16呼間）
  - ・1～8小節（16呼間） 池になって座っている子どもたちは歌の一番をうたう。2匹のめだかは、仲よく並んで泳いだり、前後になって泳いだり、自由に池の中で表現あそびをする。
- Ⓒ 間奏 4小節（8呼間）
  - ・めだかの子は、1呼間に1拍手しながら、座っている子の好きな子の肩にタッチして、交替する。
  - ・タッチされた子は、こんどはちょうちょになっておどる準備をする。
- Ⓓ ちょうちょのおどり 12小節  $\frac{6}{8}$  拍子（72呼間）
  - ・1～4小節（8呼間） ちょうちょのAは、自由にとんだり羽をやすめたりしてあそぶ。
  - ・5～8小節（8呼間） ちょうちょのBは、Aと同じようにあそびだす。
  - ・9～12小節（8呼間） ちょうちょのA、Bは自由にあそび、最後の小節で向かい合ってごあいさいして、手をつなぐ。

**E** ともだちのちょうちんとあそぶ



ひ ら ひ ら ち ょ う ち ょ な か よ し ち ょ う ち ょ

お い け の ま わ り を と ぶ よ ひ ら ひ ら

**F** 間奏

**G** (後奏)



*mf*

*rit.*

*Fine*

おいけのともだち

ねらい 幼児に親しみのある身近なものから題材を選んで、表現あそびをしながら相手を認め合う（仲よくあそべる）ことにねらいをおき、リズムやうたに合わせて楽しくあそぶ。

う た 近藤すなほ作詩 1. おいけで すい すい すい  
 なかよし すい すい すい  
 はなびら うかんだ  
 おいけの なかで すい すい すい



**B** ともだちのめだかとあそぶ

お い け で す い す い す い な か よ し す い す い す い

は な び ら う か ん だ お い け の な - か で す い す い す い

**C** 間奏

*mf* *rit*

**D** ちょうちょうのおどり

*mp* *legato*



主人・ハイ10円ですとか、15円です。

・どうもありがとう。

買ったねこを抱きあげて、かごに入れたり、箱に入れたり、つつみ紙で、つつんでしまう様子を見ると、他の子どもは、自分もそうしてもらいたくて、本当に子ねこになりきってしまう。模倣あそびの展開が、実現する。

他の動物も方法に同じようにして、其の動物の特長を表現できるような言葉の導入をするとよい。

例

こぶたさん

・このこぶたさんは、ごちそうが大好きですよ。

・おひるねが、とても好きなんです。グーグーねてしまいます。

「動物になった子どもは、グーグーといいながら、ねる表現が予想される。

・しっぽのクルクルまいたのがいいです。

・とってもみんな仲よしなんです。

(子どもは手をつないだり、相手の子どもの頬っぺを両手でおさえたりする。)

## 作品2 「おいけのともだち」

三歳をこえてくると友だちの人数は次第に多くなり、集団行動をとるようになる。三歳という年代が、社会的関係においてめざましい発達をとげてくることは、この時期の遊びの50%以上が集団遊びであるといわれることからわかる。この時期以後に集団活動はようやく発展の緒につくのである。そして幼児の集団活動も遊びの中で展開されていく。

遊びは元来、毎日の生活の中でくり広げられる無目的な経験であるが、この積み重ねられた経験の印象・記憶をひとつの作品を提供することによって、目ざませることができ、成長・発達につながっていくものである。

この「おいけのともだち」は、春の池のまわりの様子をあらわしている。めだか、ちょうちょの表現のみであるが、「動物デパート」より発展してるのは、めだかもちょうちょも集団になり活動することなのである。

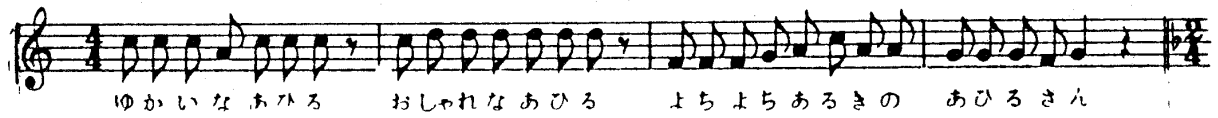
歌詞は動きを誘発するようなことばで語られる。振りは自由創造的表現で、決して振りつけによる規制をせず、子どもの思うまま、感じたままに表現させる。

Allegretto  
(前奏)

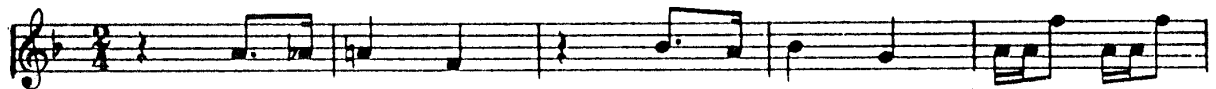
おいけのともだち

近藤 幸子 作曲  
野石 川 子 作詞  
A めだかのめどり

(あひるやさん)



(あひるの模倣あそび)



### (動物デパート指導及び展開)

(動物デパート指導及び展開)

1. 曲や歌を指導する前段階で、模倣を主とした、遊びの展開をする。教師が、お客と、主人をかね、子ども達を動物そのものにして、教師の言葉どおりの模倣あそびをさせる。

例

客・こんにちは、ねこ下さい

主人・ハイ、どんなねこがいいですか。

客・泣き声のかわいいのを下さい。

ねこの子ども・ニャオ、ミョーなどと自分のすきなねこになって泣く。

客・このねこさんの声は、かわいいですね。

・このねこさんは少し、こわい声ですねとか、適当に子どもの様子にあわせて言葉を発展させる。また、

客・お顔を洗うのが上手なねこさんはおりますか。

・まりと遊ぶのが上手なねこさんはどのねこさんかしら、

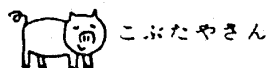
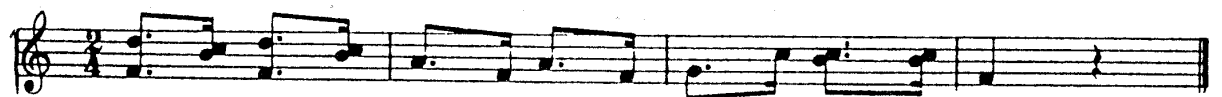
というと、子どもは、夢中で顔を洗ったり、まりと遊ぶ模倣をする。

・このねこさんにいたします。おいくらですか、

(こぶたやさん)



(こぶたの模倣あそび)



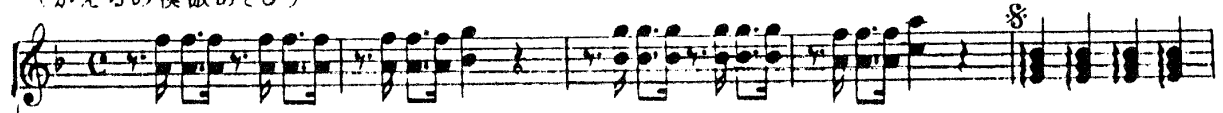
(かえるやさん)



(かえる)



(かえるの模倣あそび)



## 作品1 「動物デパート」

子どもは、自分の周囲にある外界に感応してこれを模倣する。この種の模倣表現を「想像あそび」ともいう。

このあそびは二歳ころから次第にさかんになり、五・六歳ころがその頂点になる。そして子どもは模倣し、満足してあそんでいるうちに、心身の発達が促される。

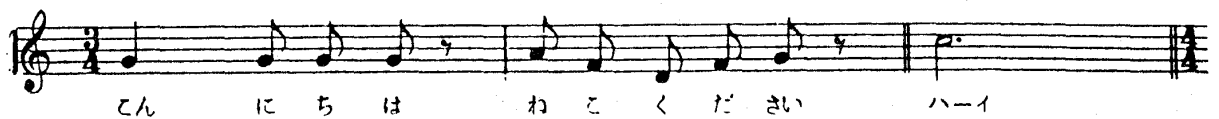
この「動物デパート」は、ペットショップの大型店とでもいおうか、たくさんの動物を観察することができる。そこにいる動物たちを観察し、その動物たちと一体になってしまう子どものあり方を、そのまま表現にして引き出そうとしたものである。

この課題では、きわめて単純に、ゆきあたりばったりな表現で構成されてもよいし、たとえば「ねこの模倣あそび」の場面では、自由に自分の知っている「ねこ」のいろいろな姿、動作を思い出し、その日常経験しているそのものの印象・記憶を整理して表現してみるということも大切である。他の「こぶた」「かえる」「あひる」「さる」も同様に扱い、その動物特有の表情をイメージし、表現する。この積み重ねによって自分の考えたこと、感じたことが、すぐ表現に結びつくようにしていく。そのことによって子どもの想像力は、はずみがつき、そしてその流れにそって思考が活発に発動していく。

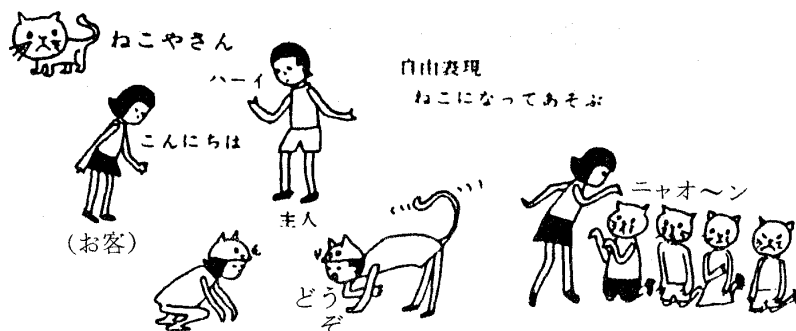
## 動物デパート

桐生 敬子 作詞  
近藤 すなほ 作曲

(ねこやさん)



(ねこの模倣あそび)



エジソンが蓄音機の発想を得て、それを現実化するのにどれほどの労苦を伴ったか。あるいはニュートンの万有引力の発見にしても、有名な逸話では、りんごが木から落ちるのを見て発見したとなっている。しかし、インスピレーションは一瞬でも、それをこの世界に表現するために多大な困難を伴っているのである。

これはどれほど訓練しても困難な作業であることは明らかである。しかし、訓練によって上達することはどの世界においても可能なのである。幼児期における創造的な表現活動もその意味において、展開に工夫をし、感性豊かな発想のできる人間の育成をめざして進んでいこうとするものである。

### ① 幼児の経験と思考

以前、本学附属幼稚園で「七夕」について話しをする機会があった。「天の川」について話しているうちに、次の質問を五歳児三十数名にぶつけてみた。

『「天の川」って川なのに、どうして水が落ちてこないの?』と聞くと、この不意の質問に全員がしんと考え込んでしまって、しばらく静かな時間が経ったのを私自身、とても印象深く思い出す。結局ひとりが発見したというように「星だ!」と言い、それに続き皆がそれぞれ「星だ!星だ!」と言って終わったが、この場面において、幼児も適当で適切な誘導に、自分の経験・知識の中から解答を見出す力、思考力があることを実感させられた。いつもリズム指導・音楽指導による反発的訓練のときが多いだけに、この面の活動の研究が必要と思われる。

創造的表現において必要なことは、自ら考え、行動をし、発見し、そして満足する。この積み重ねをしていくことによって、自らの意欲を湧かす人間的感動の世界を歩ませることである。創造的表現の教育は発見、そして認識していく過程を、この喜びを満足させる機会でなければならない。

### ② 創造的表現と芸術性

創造的表現の機会には芸術において、最も奨励される。科学や知識の論理的・分析的であるのに対し、芸術に関与する感性や情操は直感的または類推的であり、また飛躍的である。そして最も主体的である。

表現のすべてのものは専門的に発達すると、いわゆる芸術として存在するものとなる。創造的表現においては、この芸術性を用いて教育することも一般教育手段として考えなければならない。幼児期の表現においても芸術性と非常に近似した形をもって表れてくるであろう。芸術とは、その表現する意図は「美」を強調するものであり、その意図とそこに高度の技術を発揮するところに最高の芸術の意義があるが、幼児の創造的表現においては、この美的情緒としての表現も当然含まれるとしても、それは目標として掲げるのではなく、あくまでも、自己表現として、その表象を自己の内なるものを表すものとして、それを人に伝達する技能方法を学ばせるものであろう。

そこには、感性・感覚の練磨が必要となってくる。次に作品を、その系統的指導段階性と、さらに創造的表現を意図した指導のあり方を見てみよう。

### ③ 作品にみる創造的表現の展開

えられることは、幼児期の脳細胞が最も受容的で柔軟な時間に絶えず、音楽脳といわれる右脳に情報が蓄積していったのであり、未来のモーツァルトを形作っていたのであると思われる。

もちろん過去の天才たちが、幼児期の感性教育にもとづく表現活動によって育まれていたわけではないが、今後の未来社会において、「小さな創造性を発揮する、小さな天才」を数多く輩出するための方法論を感性・表現教育の側面から模索していきたい。

## 2. 情報化社会における創造的表現の役割

さて、創造性を発揮する天才たちを多く輩出するために、今後の未来社会における状況をシュミレーションしていくことは重要である。ひと言で言って、未来社会は「情報化社会」になる。これは知性と理性をフル稼働しなくては追いつけない社会である。21世紀の子どもたちは、現在の10倍、100倍の情報を処理しなくてはいけなくなるであろう。しかもそれらを短時間に処理するだけでは情報の意味もない。そのなかで必要なものを取捨選択し新たなものを創出する必要がでてくる。

そういった時代に教育はどう対応していかななくてはならないか。まず知識の吸収が今以上に厳しくなるであろう。大量の情報を処理するには、大量の基礎知識が必要となってくる。これを低学年のころから吸収していく必要がある。実際、現在の学校では、20年前の教育課程よりもはるかに早い時期に基礎的な知識を吸収するカリキュラムが組まれている。来世紀以降、この傾向はもっと進むであろう。

そのときに落とし穴となるのが、感性教育の軽視である。情報処理能力であれば、コンピュータのほうが人間より能力があることは当然である。前述の「地からの創造」であれば、コンピュータのほうが上かもしれない。過去の名曲を組み合わせた曲ならば、コンピュータでも作曲できるという。

しかし知識社会であればあるほど、感性が大切になってくる。なぜならば「地からの創造」であれば、論理と論理の組み合わせ、すなわち知性と理性だけでできるが、「天からの創造」においては、知性と理性のみで地上にへばりついては決して出てこないからである。知性と理性は論理を組み合わせ、組み立てていくが、感性は論理を超えて一気に結論に飛ぶ力があるからである。

より正確に言うと、知性と理性によって固めた基礎に対して、感性の訓練を施すことによって、一躍飛翔し、インスピレーションを受けやすい状態にし、新たな創造性を生み出そうということである。

すなわち幼児期に、あとに述べる作品の趣旨と方法にしたがい、感性表現の教育を施すことによって、創造性の活性化を期待していきたい。

## 3. 創造的表現について

さらに天からの創造において、最大の難問が、表現の難しさである。インスピレーションは考えの核として「与えられる」。しかし、それを地上に適応するように翻訳する作業は、とてつもなく難しい。

そこから異種のもを創っていく側面があるように思える。これは地上にあるものを合成し、再編し、二次加工して付加価値を与える創造であることから、「地からの創造」と名づけよう。この形式は学術論文にも多い。裁判においても、過去の判例の集成を新たな判決の材料としている。これは既成のものを組み合わせることによって新たな創造をしていることから、「地からの創造」と言ってもよいであろう。この創造に従事している人たちを見ると、いずれも秀才と言われる職業である。

ところが創造には、まったく違った次元のものもある。既成のものの組み合わせにとどまらず、まったく新たなものが生ずることがある。ある日突然、この地上にはまったくなかった次元のものが出現することがある。これは「インスピレーション」と言ってもよい。これは明らかに地上のものの組み合わせを超えた価値の創出である。そしてこれは人類に多大な貢献をもたらしていく。

たとえばエジソンの電球や蓄音機は、既成の組み合わせでできたものではない。「世界の夜を明るく照らせたら」とか、「自分の声が再生できたらおもしろい」という発想で、実験し、研究し、その結果完成した。

エジソンの「私の発見は、99%のパースピレーション（努力の汗）と1%のインスピレーションである」という言葉が有名であるが、これは実は「1%のインスピレーションがなければ99%の努力は無駄である」という言葉を、新聞記者が書き換えたということが最近明らかになっている。

（『快人エジソン』本文より）

前者の言葉であっても、努力の教えという意味では非常に教訓となるので特に否定する気持ちはないが、後者の言葉はインスピレーションの偉大さを物語るに余りある。

このインスピレーションを中心とした創造は、地上にある既成の概念を超えているという意味で「天からの創造」と名づけよう。

あの天才モーツァルトも、すばらしい音楽環境において、模倣からはじまったとしても、そこに必ず天からの創造、すなわちインスピレーションの要素が加わってはじめて、後世への名曲として残っているのである。単なる模倣にはじまり模倣に終わるのであれば、人類への貢献はないであろう。このように「天からの創造」というものは重要なものであり、これを教育に組み込むことは、教育にとっても是非ともなし遂げたいことである。

そこで本稿の目的は、「天からの創造」をうける感受性・感性を身につけるための指導のあり方としての幼児の表現活動の一側面に焦点をあてて論じてみたい。「天からの創造」を発揮した人たちはいずれも天才といわれる人物であるので、天才教育への模索とも言えようか。

ここでモーツァルトの幼児期は、どのような感性的環境であったのかをみていきたい。

モーツァルトの父親は音楽家であり、この父は五歳年上の姉と弟の二人の子どものために音楽教育プログラムをつくり、それを厳格に実行したという。父、レオポルド・モーツァルト自身、音楽家であるからには自らの練習は欠かさなかったであろうし、弟子にも教えていたという。このように、モーツァルトは生まれながらに音楽の鳴り響く環境にあった。ということは、現在において考

いかなければならない。

「模倣から行動へ」、そして漸次、「自らの思考による行動へ」とその道筋をたどる。

これを創意的行動といい、表現の最初の出発である。

## 1. 創造とは何か

### ① 創造の基礎としての模倣

「はじめに」において、すべては模倣にはじまるということを述べた。これは、基礎がなければ創造もまた、ないということである。基礎がなく「創造性」だけを發揮しようとする、それは単なる思いつきである。これでは社会に資するものはまったくなく、がらくたが増大していくにすぎない。

これは、材木などの材料がないままに家を建てようとするのに似ていて、まともな家が建とうとはとても思えない。やはりきちんとした材料、そして家を建てるだけの技術があってはじめて家が建つのである。

日本では「詰めこみ教育」と評判が悪いが、真の創造性を育むには基礎となる教育は大切である。また、最近は議論をさせる教育が脚光を浴びているようだが、基礎知識のない者同志がいくら議論を重ねても、あらたな創造ができるとは思えない。すなわち、創造のためには基礎となる教育が大切であり、教育の最も原初的形態が、模倣ということである。ここに創造の基礎としての模倣というものがある。

### ② 模倣による創造とは何か

「ものをまなぶ」ということは、ものを真似ぶることであり、真に手本に似ることである。

現在の日本の繁栄は西欧の科学技術あるいは社会システムの模倣が原点にあったということは明らかである。中国のような独創性のみを重んじ、自国のやり方に固執した国家と比べてみると、日本のほうがはるかに創造力のある国家となっている。しかし日本の繁栄は単なるコピーではなく、「真似」は手本をこえているときには、単なる「真似」を超えてしまうという実証でもある。アメリカの哲学者エマソンは「真に独創的な人間のみが、他人から借りることを知っている」と言う。ものを学ばず環境の影響も受けずの全くの独創性を求めるとしたら、独創的な人間はひとりとしていなくなる。

創造的表現の教育においても、この人間の他から影響、そして真似—模倣行動を大いに援助し、奨励していき、その積み重ねの上に、個人としての内的経験も加味されて、味付けされて、個性化していき、創造化につながるよう配慮していく。それには模倣対象が個人に及ぼす影響を深く考えて、周到に用意されなければならない。

### ③ 天からの創造と地からの創造

次に、創造そのものについて考察する。創造には、知識と知恵を組み合わせ、論理を組み立て、



# 『創造的表現にいたる指導過程の研究』

—主として幼児表現教育の側面から—

近 藤 すなほ

(1)

A Study on Kindergarten Education Program

—A Teaching Approach to Develop the Child's Self-expression  
through Dancing and Singing —

By Sunao Kondo

## はじめに

教育上でいわれる創造とは、自己の経験をもとにして、既成的概念にとらわれることなく、自己のイメージを表現することにあると考えられる。その表現とは、自己の内面にあるものを外に表出すること、つまり感じたことや考えたことを表出するのみでなく、表出という行動をすることにより、自己を意識化する側面と、また他者に伝達する側面を含んだ概念といえる。その意味で幼児教育における表現活動は、その人間形成の基礎をつくる上に重要な位置を占めている。健康生活、社会、知的生活の育成とともに、常に有機的な関係を保ちながら、特に情緒生活とは不即不離の連関によって、人間生活に欠くことのできないものである。

人間の生活には、習慣による、あまり意識しないで遂行する行動と、意識的に発想し、工夫していく創意性のある行動とに分けられる。習慣性による生活では、日常において積み重ねられた模倣の連続があったのである。これに対して創意性のある生活は、模倣に端を発しながらも、個性的であり、個人の目ざすところに向かって刷新される生活である。

すべての行動は模倣からはじまる。このことが表現の出発であるが、まだ模倣的表現を表すということとは、内面にある自我が未分化の状態にあることを反映していると考えられる。そしてやがて経験が豊かになるにつれ、幼児自ら考え、工夫し、表現に自己の個性を見出すようになる。しかし、幼児期の特徴の一つは、行動の一つ一つがまず模倣からはじまるということである。指導する側からいえばこの幼児の模倣性を巧みに利用して教育するということである。

この模倣性こそ、教育のチャンスであり、行動の発達の最も重要な機会である。教育において、この「模倣」を誘導とし、学習の重要な契機とすべきである。このことを教育の世界で大きな価値として見て